９　知識・概念の構造図「現代社会をとらえる見方や考え方 ―イタイイタイ病とのたたかいを通して―」の場合

価値

市民としての行動

感　情　　意志力

科学的社会認識に基づいた合理的判断

この合意とこれまでの取組はよかった	この合意とこれまでの取組はよくなかった

概念

「効率」	・時間はかかったが、神通川はきれいになり、米も作れるようになった。 ・高齢な被害者を死ぬ前に救うことができる。 ・カドミウム腎症の患者も救うことができた。 ・立入調査は公害防止に高い効果を上げた。 ・長い取り組みが、「緊張感ある信頼関係」をつくり、互いの思いを近づけた。	・これまで大変なお金がかかった。 ・これまで大変な時間がかかった。 ・全ての人を救うには時間がまだかかる ・まだ５００人から１０００人に対してお金を払わなければならない。 ・国が認めてくれれば、もっと早く解決したはずである。
「公正」	・二度と起こさない、早く解決するという思いは双方が同じである。 ・「緊張感ある信頼関係」を双方がもった。 ・カドミウム腎症の患者に対象が広がった。 ・今後も引き続き公害防止は続いていく。 ・資料館ができたことで、未来にも語り継がれる。	・国が「カドミウム腎症」を認めていない。 ・認定されずに死んだ人は報われない。 ・ここで解決してしまったら、少しずつ風化して、このことを子孫は忘れていくかもしれない。

引き続き患者の救済や公害防止などが行われることを確信する「緊張ある信頼関係」があったからこそ、被害者団体は謝罪を受け入れ、一切の問題が解決したことを双方合意することができた。

被害者団体の変化

被害者団体は原因企業の取組を根気強く見守ることで、原因企業の最大限の配慮に誠意を感じ、原因企業との「緊張ある信頼関係」を感じることができた。

自然の変化

土壌復元が 2012 年に完工し、2015 年には汚染対策地域の指定が 99%まで解除された。
玄米中のカドミウム濃度が法律で規定されている濃度を大きく下回るようになった。
神通川の水が、法律にもとづくカドミウムの水質環境基準を大きく下回るようになった。

原因企業の変化

原因企業は、被害者団体との３つの約束を確実に履行したことで責任と義務を確実に果たし、原因企業との「緊張ある信頼関係」構築につながった。

知識

被害者団体は、判決が出た後も団体を解散せず、原因企業の取組を見守り続けてきた。

被害者団体は、４０年続けて工場の立ち入り調査を厳しい目で行ってきた。

被害者団体は、資料館の建設や未解決の腎臓障害の救済などを訴え続けた。

被害者団体は、発生源対策専門委員会を立ち上げ、今後も監視していく体制をとっている。

県は、被害を受けた地域の住民を守るために、住民健康調査を行っている。

県は、「農用地の土壌の汚染防止等に関する法律」に基づいて、土壌復元のための対策を進めた。

県は、「富山県公害健康被害認定審査会」を毎年開き、患者の認定を行っている。

県は、「環境保全等に関する基本協定」に基づいて、神通川で水質調査を毎年行っている。

原因企業は、４０年にわたって工場の立ち入り調査を受け入れてきた。

原因企業は、国が公害として認めていない腎臓障害について「健康管理の支援」を約束した。

原因企業は、イタイイタイ病資料館の建設に５億円を投じた。

原因企業は、発生地の農業補償を行い、土壌の復元費用を全面的に負担した。

原因企業は、排水対策や排滓の流出を防ぐ対策など、公害が起こらないようにしている。